

第16回米百俵賞受賞

(平成24年6月15日表彰)

シルパカラ・アカデミー劇団

(バングラデシュ)



バングラデシュでの戯曲「米百俵」の公演を通し、現地で教育の重要性、人づくりの大切さを説く活動を行った。

■受賞時プロフィール

シルパカラ・アカデミーは、国内外にバングラデシュの文化を発信するため、昭和49年に設立された国立芸術学院。

平成18年3月、国際交流基金の活動の一環として、日本からバングラデシュに指導者である京都「すわらじ劇園」木村進次氏が派遣されワークショップを開催、戯曲「米百俵」を紹介したことをきっかけに、ドナルド・キーン氏の英文翻訳をベンガル語に翻訳し、アカデミーのゴラム・サルワー氏が脚本・監督し舞台劇に仕立てた。シルパカラ・アカデミー劇団は、同年8月に初めて公演が行われたのを機に、芸術院に属する若者が「米百俵」を上演する劇団として特別に

立ち上げた。構成は25人。侍装束に身をつつみ、手作りした衣裳や舞台装置、ちょんまげ姿で熱演しているベンガル人、すべてが当時の長岡を彷彿とさせるものであった。

上演当初は、日本の戯曲をベンガル語の演劇で表現することに緊張しつつ、興奮して取り組んだ。指導を受けた者が後進を育てていく動きもあるなど、精進を



▲平成18年から始まった「米百俵」公演の様子

重ねており、これが定期的に開催されていくことにつながっている。

これまで、首都ダッカのほか国内10都市でも公演が行われ、5年間で48回、観客動員数は延べ2万4千人を超える。

明日の国づくりを担う教育の重要性を問いかけた公演の内容は、バングラデシュの人々から共感を得ている。観劇した教師が、改めて教育の重要性を認識し熱心に授業に取り組むようになったり、また、私財を出して学校を運営している現地の人の中には、「自分が行ってきたことに自信がもて、いつか教育を受けた若い世代が育ち、日本のようなすばらしい国になることが夢だ」と語る人もいなど、現地への影響力は大きい。

書籍や写真など記録物で後世に伝える方法がたくさんある中で、純日本劇をバングラデシュの言葉と演技で自国の人たちに伝えるということは大変意義



▲「米百俵」公演の様子

深いことであり、長岡が育んだ「米百俵」の精神が時代や文化、地域を越え世界に広がるきっかけとなるものである。

■受賞後の活動

平成18年に初めて「米百俵」を発表して以来、平成28年までの10年間で、首都ダッカでの公演とダッカ以外の州での地方公演を合わせ、「米百俵」は75回公演された。

侍姿の役者、殺陣シーンなど、異文化の芝居の中に宿る「教育」「貧困」「国づくり」といった普遍的なテーマは、「日本にもこうした苦しい時代があったんだ」、「今まさに自分たちの国にもこうした信念が必要だ」とベンガル人の心をつかみ、感動を与え続けている。

演出家のゴラム・ソルワー氏は「この芝居を上演し続けることで、この国の未来のために人々の意識を変えていけたら」と話している。

■主な受賞歴

○平成20年 国際演劇協会「内村直也」賞